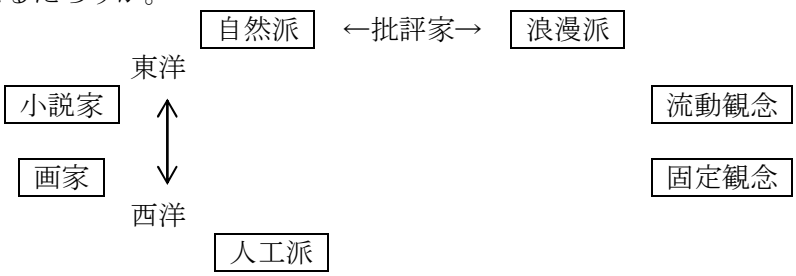
『三四郎』第九章文学論

Junko Higasa

夏目漱石作『三四郎』第九章初めから 1/3 は、与次郎が根回しして原口さんに開かせた精養軒の会の場面である。その 30 人足らずのお客の中で、当然ながら、この小説の核を成す数人がクローズアップされている。

坊主頭の広田先生と文科の有力教授である長髪の庄司博士、縞の羽織を着た批評家と田村という小説家、理学者の野々宮さんと画家の原口さん、そして三四郎と与次郎である。それは順に見ると、社会的に見る東洋と西洋、文学的に見る批評家と小説家、感覚的に見る理性と感性、思考的に見る固定観念と流動観念という対の組み合わせになっている。

そして視点を変えると「各自勝手な所に座った」とあるが、意味深な席順である。物理という浪漫派の野々宮さんと自然派の広田先生の間に、批評家が座っている。東洋の広田先生の向かいに、その髪型同様に黒々と渦を巻く西洋の庄司博士が座っている。浪漫派の遠くに座っている画家の原口さんの隣には小説家が座っている。それを並んで見ているのが、固定観念の三四郎と流動観念の与次郎である。移ろうものの一瞬を捉えようとする画家の原口さんは、固定的理論に囚われる三四郎の遠い真向いに座っている。彼らの周りには他の客もいるのだが、主要人物だけの位置関係を見ると、こんな図になるだろうか。



このような舞台装置上で、文学における自然派・浪漫派の観念が示され、小説とはどういうものかが説明され、それを漱石がどのように施したかが語られる。

まずは三四郎と与次郎の場面。『三四郎が小さな声で、「些(ち)と、ダーター、ファブラを遣らないか」と云うと、「今日は不可(いけ)ない」と答えたが、すぐ横を向いて、隣の男と話を始めた』与次郎は三四郎の前で罵倒した論文を、著者本人に向かって褒めているのである。そして『与次郎はまた此方(こっち)を向いた。「その羽織は中々立派だ。能く似合う」と白い紋を殊更注意して眺めている』この与次郎の行為は本音と建前の 20 世紀の生き方のようである。しかし、これを別角度から見ると「表立っては言えないけれど、ダーター・ファブラ―西洋じゃ幅が利かない、東洋でなければ―日本の小説というからには西洋の模倣ではダメだ、東洋の質を持たなければ。ほら、この紋のように日本に良く似合う伝統的特質があるだろう」即ち、漱石は西洋小説の表面的模倣に偏る文壇に対して、東洋的内面変換を推奨しているのである。

それに続いて、今度は原口さんが野々宮さんに声をかける。その時、向かい合わせに言葉を交わしていた広田先生と庄司教授、すなわち東洋と西洋が『二人の応答を途

中で遮ることを恐れて、談話を止めた。その他の人もみんな黙った。会の中心点が始めて出来上がった』この時点で、浪漫派と自然派の論点が設定された。

まず、「画家も根気仕事だが、物理のほうはもっと大変なようだ」と云う原口さんに、野々宮さんが「画はインスピレーションで描けるからいいが、物理の実験はそうはいかない」という。それに対して原口さんは「今どきの画家はインスピレーションだけでは書けない」「小説だってそうだろう」と小説家に振る。ここで文壇に本当の「自然派」の少ないことが分ると同時に、漱石自身がインスピレーションだけで書いていないことが分る。小説は「光線の圧力は自然のままでは見えないから、それを見るための装置を開発して目に見えるようにする」物理学のようなものであるから浪漫派である。しかし「装置を開発した後は、観察するだけだから自然派でしょう」と物理学者が云う。「すると浪漫派的自然派ですね。イプセンのような」と博士が比較を持ち出す。そこへ「イプセンの劇は、物理と同じ位の装置があるが、その装置の下に働く人物は自然の法則に従って動くとは限らない」と批評家が云う。ここで広田先生が補足的反論をする。『そうかも知れないが、こう云う事は人間の研究上記憶して置く可き事だと思う―即ち、ある状況の下に置かれた人間は、反対方向に働き得る能力と権力を有している。と云う事なんだが』その発言の裏付けは漱石の「断片」に見られる。それを現代風の言葉に替えて簡略にまとめると、以下のような内容である。

「人間の普通の活動を陳腐として、異常の活動を写そうとするときに、その異常活動を可能にする situation（立場・場所）が入用である。この situation を作るのが、一つの目的である。その目的の活動は、自然を欠いても、無理でも仕方ない。思い通りの situation になればよい。人間はまとめることが好きである。自然は存外まとまらないものである。だらしないものである。これをまとめたがるのが人情で、その人情を満足させるときには、不自然になることがある。それでもまとめることを好む場合がある。したがってまとめるためには、作中の人物の自由行動を束縛することがある。圧制が必要な場合がある。無理にでもまとめる必要がある。まとめるためには人事上、一人の権力に自己の自由を委任することが必要となる場合がある。（孔明や正成の戦略は人工的なものであるが結構である）個人主義の世界にはまとまりがつかないことが多い。まとまらなくても自由行動が良いという気になる。従ってまとまらないことを見聞きしても左程気にならない。この傾向は小説にも当てはまる。読者は小説にまとめることを要求しなくなる。作家も無理にまとめようと思わなくなる。従って作中人物を、その性格に応じて自由自在に働くようにする。小説の内容はアレンジメント・フラワーのようなものである。A は A で面白く、B は B で面白いのは結構。A がつまらなくても、B に添えることで面白くなれば結構。A も B も面白いが、二つ並べると互いを制するのはまずい」この内容は『三四郎』の予告文に反映されている。

その『三四郎』の予告文の内容を簡略にまとめると「田舎の学校を卒業して東京の大学に入った三四郎が新しい空気に触れ、同輩や若い女に接触していろいろに動いてくる。手間はこの空気の内に、これらの人間を放すだけである。あとは人間が勝手に泳ぎ、その空気に読者も作者もかぶれてこれらの人間を知ることになると信ずる。もしかぶれ甲斐がなく、知り映えのしない人間だったら諦めるほかはないが、それでも書いていることは尋常であって、摩訶不思議は書けない」これが作中の次の会話に反映される。『「じゃ、ある状況の下に、ある人間が、どんな所作をしても自然だと云う事になりますね」と向うの小説家が質問した。広田先生は、すぐ、「ええ、ええ、どんな人間を、どう描いても世界に一人位はいる様じゃないですか」と答えた。「実際人間たる吾々は、人間らしからざる行為動作を、どうしたって想像出来るものじゃ

ない。ただ下手に書くから人間と思われないのじゃないですか」小説家はそれで黙った』ここまでが広田先生―漱石の先の評論家発言に対する補足的反論の内容であり、小説家全般に対して言う「人間の研究上記憶しておくべきこと」である。

そして今度は博士が云う。「ガリレオが、一振動の時間は振動の大小にかかわらず同じであることに気付いたり、ニュートンが林檎で引力を発見したりするのは、始めから自然派ですね」すると理性が『そういう自然派なら、文学の方でも結構でしょう。原口さん、画の方でも自然派がありますか』といって感性の方へ話を振る。

そこで画家が、何でも事実でなければ承知しない「自然派」として、クールベの名を挙げる。クールベは聖なる者・高貴なる者が藝術の対象とされる世の中で、市井の人間や自然を描いた共和主義・写実主義の画家である。しかし『（その自然派は）「ただ一派として認められるだけさ。又そうでなくちゃ困るからね。小説でも同じ事だろう。ねえ君。やっぱりモローや、シャヴァンヌの様なものもいる筈だろうじゃないか」「居る筈だ」と隣の小説家が答えた』モローは聖書や神話を想像的・幻想的に表現した象徴主義の画家で、自ら「自由な才能の発展」の橋渡し役を担い、19 世紀末の文学者に多大な影響を与えた。シャヴァンヌは分類が難しいとされるが象徴主義に近く、多くの芸術家の心に、その静寂的物語的作風の画を印象付けた。画家の原口さんは云う。彼らの表現法は小説でも同じである、と。ここまでで漱石は、物理実験手法や美術手法を通して「小説とはいかなるものか」を説き、小説家を納得させて閉会させる。一口に「自然派」というが、野々宮さんが言ったように、ガリレオ、ニュートンのような自然派なら文学でも結構。またクールベのような自然派は、文学の中でも一派に過ぎず、文学界全体の傾向として捉えてはならない。安易に自然派というべからず。

さて、ここでイプセンに話を戻してみよう。イプセンはナショナリズムの闘志であったが、弾圧が烈しくなると手を引いた。国内の戦闘意欲が高まると自らは故国を去った。それは魂の中に潜む邪悪として彼の心を苦しめた反面、母国と自分を客観視できる視点となった。それを漱石に転じて云うなら、『吾輩は猫である』で、「日本は露西亜と戦争をしているが、吾輩は日本猫だから日本贔屓である。その気になれば鼠（ロシア）を取れる」と豪語させているが、漱石は徴兵を逃れるために北海道へ送籍している。また倫敦へ留学したことによって、母国並びに自分を客観視できた。このように二人の視点は自分の外側にある。その視点を持って、他国と母国の間にいるイプセン。明治の精神と個人主義の間にいる漱石。この二人は、それぞれの暗い過去を背負って、未来へ続く橋を舗装しながら新しい時代へ渡ってゆく。違いは世の中を映す表現法である。イプセンの表現は直接的であり、漱石の表現は間接的である。先の画家に例えるなら、色彩的にイプセンはクールベに、漱石はモローに近いかもしれない。イプセンは『人形の家』で、女性の人間としての権利を当人に直接発言させた。漱石は『三四郎』で、同権利を当人に比喩発言させた。その手法の違いの原因のひとつには国家の違いがあるだろう。しかし人間である以上、主張は同じ結果に導かれる。

最後に、「文学でも同じことが言える」という表現を、もとの位置に戻してみよう。すなわち、まとめたがるのが国であり、そのために異常活動を可能にする場所を設定するのがひとつの目的となる。自然を欠いてもまとめる必要があれば、ひとつの国家権力に国民の自由を委任することが必要となる場合がある。ところが個人主義が発展するとまとまらなくても自由が良いという事になる。従ってまとまらないのを見聞きしても気にならなくなる。国民はまとまることを要求しなくなる。国も無理にまとめようと思わなくなる。それが個人主義が発展しすぎた社会の危険である。　(2014.7.4)